

平成27年度 福井県立清水特別支援学校 学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
1 教育課程 学習指導 研修	校内の授業研究会・研修会に参加し、キャリア教育の観点を取り入れた児童生徒一人一人に合わせた支援を考える。	<p>キャリア教育の観点から児童生徒の自立を目指す力を達成するために目標設定・支援方法の考察・実施・振り返りや改善が3点以上できた教員が92%いた。また、授業改善が「できた」「おおむねできた」も92%の教員が回答し、目標指数に達した。保護者の89%も自立を目指し一人一人に合わせた支援を行っている」と評価した。</p> <p>これは『キャリア教育』について校内研修や教員や保護者向けの通知、指導案の目標の項にその目標が将来どんな力に結びつくのかを明記するようにしたこと、今の目標が将来どんな力に結びついているのかを懇談会で保護者に説明したことがこの評価につながったと思われる。研究対象の授業については、キャリア教育の観点から授業を改善することが意識されたようだ。他の授業や学校生活の中においても定着させていく必要がある。</p>	<p>来年度も引き続きキャリア教育の観点から授業改善に取り組みたい。そのため、今年度行ったことに加え、授業研究会でもキャリア教育の観点を協議内容の柱とし、外部講師を招いて助言をいただきながら行いたい。</p> <p>また、来年度も、今の目標が将来どんな力に結びついているのかについて懇談会で保護者に対して説明を行いたい。</p>
2 生徒指導	ヒヤリハットの事例やチェック表、広報などを活用し、児童生徒の健康で安全な学校生活を送るための支援や環境づくりに努める。災害時に備え避難訓練を行ったり、連絡体制やひかりの村との連携を整えたりする。	<p>教員に関しては、支援や環境づくりが「できた」「おおむねできた」の回答で100%となった。また、災害時を想定した行動を考えることについても「できた」「おおむねできた」の回答で100%となった。今年度は、ネットワークの掲示板を利用してヒヤリハット事例とその改善策を職員全体で共有し、事故等の未然防止に努めるようにした。その結果、医療機関に受診しなければならないような事故は起きていない。また、教職員を対象にロールプレイ形式で行った防犯講習会や傷病者対応訓練に大きな成果があった。さらに教職員間の連絡に緊急メール体制を構築できた。</p> <p>保護者に関しては、昨年度に引き続き保健室来室記録としてけがや処置等の詳細を文書で報告したり、緊急地震速報対応避難訓練の様子を知らせしたりすることで、1名の無回答を除いて全保護者が健康で安全な環境が整えられていると回答した。</p>	<p>来年度は保護者に対しても緊急メール体制を整えていきたい。引き続き災害時における適切な行動等の研修の機会を持ち、意識の向上に努めたい。また、避難訓練や防災研修の様子をHP等を利用して保護者に伝えることで、防災に対する意識の向上も図りたい。保護者から災害時におけるひかりの村との連携の強化や引き取り訓練、及び保健指導についての要望があったので、検討していきたい。</p>
3 進路指導	学校と関係機関が連携して児童生徒や保護者をサポートしていく体制をつくる。	<p>児童生徒の支援について、関係機関と共通理解を図るための取組を行うことが「できた」「おおむねできた」と回答した教員は100%であった。また、関係機関との連携を児童生徒や保護者の支援に活かすことが「できた」「おおむねできた」と回答した教員も100%であった。保護者は、83%が学校と関係機関の連携を感じることができた」と評価し、39%の保護者は、連携の利点も感じることができた」と回答している。連携を感じることができなかった(4%)理由としては、「どのような取組がなされているかよく分からない」という意見があった。</p> <p>進路にかかわる各行事への参加の様子から、小学部低学年児童の保護者も、卒業後の生活について高い意識を持つようになっていくことが感じられた。ただ、個人差があるため、今後より多くの保護者の意識を高めていくための工夫が必要だと思われる。</p>	<p>今後も関係機関との連携体制を継続し、さらにつながりを強化していきたい。</p> <p>保護者懇談、学校評価書、進路だより等を利用して行っている取組について保護者に伝えたい。さらに保護者懇談でよりニーズに応えられるようにし、卒業後の生活について考えていく上での一人一人の年間目標について、担任と保護者で話し合っていていけるとよいと考えている。</p>
4 支援	センター的機能の意義や取組について、本校職員の理解を深める。	<p>センター的機能に関する校内研修の企画・運営については、支援部全員で取り組むことができたが、地域相談担当者のみは「3つ以上関わった」と回答し、支援部全体では57%に留まった。</p> <p>今年度は、教員全体に本校のセンター的機能についての理解を深めるために、できるだけ校外支援に関する研修への参加を推進した。その結果「実践報告や研修会等に2つ以上は参加できた」が56%、「1つは参加できた」が44%で、合わせて100%に達した。</p> <p>また、センター的機能の意義を理解し、特別支援学校教職員として取り組む役割や本校の取組について、「理解することができた」が44%、「おおむね理解することができた」が56%で、合わせて100%に達した。支援部ミニ研修会を3回実施したことや、全教員が参加する相談検討会を行ったことが、全教員の理解を促す結果につながったと考える。</p>	<p>支援部会議にて、支援部全員が、各業務の目的や理念の必要性を共有できるように努めていきたい。</p> <p>本校教職員一人一人が、特別支援学校におけるセンター的機能の意義や役割を理解し、地域の特別支援教育の推進を努める教員としての資質を高めていくために、今後も引き続き、地域支援や相談業務に携わる研修や取組を検討していきたい。</p>

	<p>学校間の交流及び共同学習において、本校と交流相手校の目標に沿った授業を実施する。 (小学部)</p>	<p>本校と交流相手校の目標に沿った授業を実施することについては小学部の全教員から「双方の目標に沿った授業が実施できた」「ある程度実施できた」という回答を得た。また、相手校の教員からは「児童が楽しく活動できる遊びの工夫を考えながら心のバリアフリーについて学ぶことができた」という評価を得た。相手校児童からは自分の目標が「達成できた」「半分」という回答が合わせて100%であった。保護者からは実施状況について「大いに満足」「おおむね満足」が合わせて100%であり、「経験を積むことができ、新しい場所への抵抗感がなくなってきた」「その時々役割が少しずつ分かるようになった」などの評価を得た。 さらに、相手校には、保護者からの一言コメントを依頼した。これにより、相手校保護者の思いも知ることができ、本校への理解・啓発につながっていると思われる。</p>	<p>学部内や相手校との打合せなどは、今後も綿密に実施し、本校が作成しているワークシートの有効活用、出前授業の実施、相手校保護者への啓発も引き続き実施していきたい。 保護者から今後の希望として「その場所でのルールや決まりごとについていければよいと思う」「できるだけ安全にお互い楽しく過ごせるように今後も継続してほしい」などの意見があり、来年度に活かしたい。</p>
<p>5 地域との交流</p>	<p>生徒一人一人の実態やニーズに応じた交流及び共同学習を実施する。 (中学部)</p>	<p>相手校に出前研修を行ったことで、71%の教員が「本校の生徒のニーズと、相手校の生徒の考えを取り入れた活動ができた」、29%の教員が「少なくとも本校の生徒のニーズを取り入れた活動ができた」と回答した。また、90%の相手校生徒が「支援を考えた」と回答した。さらに、14%の教員が「積極的に相手校の生徒と関わる場面があった」、86%の教員が「相手校の生徒の関わりを受け入れる場面があった」と回答した。本校生徒が慣れ親しんでいる活動にしたことで、相手校生徒からの関わりをスムーズに受け入れることができたと思われる。 保護者からは、内容について、子どものニーズや実態に「適していた」「おおむね適していた」との回答が合わせて100%だった。昨年度に引き続き、保護者懇談会等で生徒のニーズを丁寧に保護者から聞き取ったことなどが有効だったと思われる。</p>	<p>保護者からは「一日一緒に活動して欲しい」「交流回数を増やして欲しい」「室内活動だけでなく、外での活動も取り入れて欲しい」など、交流をより深いものにして欲しいという希望もあった。生徒のニーズが年々多様化しているので保護者の要望も合わせて計画していきたい。また、学部内や相手校との打ち合わせを綿密に行い、出前授業を通して、相手校教員や生徒の本校生徒への理解を深めたい。</p>
	<p>保護者との共通理解を深めながら交流及び共同学習を実施する。 (高等部)</p>	<p>保護者との共通理解を深めながら交流及び共同学習を「実施できた」または「おおむね実施できた」教員が合わせて100%であった。活動計画の説明、保護者の要望確認、目標設定、保護者への報告用紙記入、懇談会での感想報告など、3点以上取り組んだ教員が75%、2点取り組んだ教員が25%、計100%であった。 保護者からは、交流及び共同学習の実施状況について「満足している」または「おおむね満足している」保護者が合わせて100%という回答を得た。「内容が子どもの実態や目標におおむね適していたと思う」という保護者の回答が100%であった。保護者への丁寧な説明と詳しい報告に加え、学部便りや壁新聞で生徒の様子を写真で伝えたことが有効だったと思われる。</p>	<p>懇談会での話し合いは、保護者の希望や感想を聞く場として、今後も大切にしていきたい。「相手校の生徒の様子や感想を聞きたい」という希望があったので、映像を活用するなど丁寧に様子を伝えていきたい。来年度は、保護者や生徒のニーズが多様化することが予想されるので、今年度の取組を踏まえ、生徒一人一人の実態や目標に合わせた活動をできるように計画していきたい。</p>
<p>6 運営 (多忙化解消の取組)</p>	<p>各種会議の効率的な運営に努める。各学部・校務間の連携を図る。</p>	<p>各種会議の効率化を図るために、会議時間終了の予告・資料の事前配付、説明の工夫、校内ネットワークの活用など「3点以上取り組めた」教員が68%、2点以上は32%であり、合わせて100%であった。また、各学部・校務間の連携には「かなり」が12%、「おおむね」が84%であり、連携のやり方にはまだ改善の余地がある。もっと、効果的にするためには、「委員会など短い会議は組み合わせで一日にまとめる」「校内ネットワークの積極的活用」「仕事負担のバランスを図る」などの意見があった。</p>	<p>引き続き、多忙化解消につながることに限らず、小さなことでもすぐに実行に移していくことやお互いが協力しあい、支え合う職場づくりが必要と考える。 また、事務処理の簡素化や行事、校務の精選について職員間で協議していきたい。</p>
<p>7 運営 (人権教育の推進)</p>	<p>児童生徒への言動について振り返る機会を設け、人権を尊重した教育の充実に取り組む。</p>	<p>人権についての言動で2点以上気を付けて取り組んでいるという教員が100%、4点以上は88%となった。また、学部会で児童生徒への適切な言動について「かなり話し合えた」「おおむね話し合えた」の回答が92%であり、いずれも目標指数に達している。 保護者の評価は、学校が人権を尊重した教育に「積極的に取り組んでいる」が48%で、「おおむね取り組んでいる」とした回答と合わせると96%であった。子どもの気持ちを尊重した言葉掛けや対応がされているという意見がある一方、同性介助や支援など性差を意識した取組についての配慮に対する意見があった。</p>	<p>日ごろから、お互いに注意し合ったり、良い言動は褒め合うなど何でも話せる職場の雰囲気づくりを行っていきたい。保護者からも高い評価を得ているので、今後も人権教育や人権研修について、積極的に行ってほしい。性差に対する支援方法についても検討したい。</p>

